

飴あめ  
だ  
ま

春のあたたかい日のこと、わたし舟ぶねにふたりの小さな子どもをつれた女の旅人がのりました。

舟が出ようとすると、

「おおい、ちよつとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちにいねむりははじめました。

黒いひげをはやして、つよそうなさむらいが、こつくりこつくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といました。さむらいがおこつてはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、飴あめだまちょうだい。」

と手をさしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。ところが、飴あめだまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

ふたりの子どもは、りようほうからせがみました。飴あめだまは一つしかないのです、お母さんはこまっつてしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といつてきかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼をあけて、子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじやまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになって、子どもたちをかばいました。いねむりのじやまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思ったのです。

「飴<sup>あめ</sup>だまを出せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる飴だまをさしました。

さむらいはそれを舟<sup>ふね</sup>のへりにのせ、刀でぱちんと二つにわかりました。

そして、

「そおれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえって、こっくりこっくりねむりはじめました。

底本\*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者\*新美南吉

出版社\*大日本図書

出版年\*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用\*1999年3月25日第11刷発行

入力\*安城市中央図書館職員